異界探偵

黒助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異界探偵

【Ｎコード】
Ｎ１９０６Ｇ

【作者名】
黒助

【あらすじ】
狢沢恭一は探偵である。しかし事件を解決する探偵ではない。意に反して異界へ連れて行かれた、『神隠し』の被害者を見つける『人探し』の探偵だ。政府の役人黒須が依頼した、神隠しの被害者とは？

序話（前書き）

この小説はいわゆる「探偵もの」ではありません。推理シーンの欠片もありません。基本的に異世界でファンタジーのつもりなので、剣や魔法があっても許せる方のみお読みください。

序話

「あ～、ヒマだ～」

　俺は事務所のソファーにだらしなくねっ転がっていた。もともとくびれたスーツがさらにシワになる。まあどうせたいして変わらないので問題はない。

　俺の名前は狢沢恭一（むじなざわきょういち）、一応探偵だ。
　探偵というのは恐ろしく地味な商売だ。漫画や小説のように行く先々で事件が起こるなんてありえないし、あったとしても解決するのは警察だ。科学捜査を前に探偵の出る幕なんてのはありはしない。

「ヒマすぎて死ぬな…トランプでタワーでも作ろうかな」

　机の上に無造作に置かれたトランプの束を一瞥する。手垢のついた、きれいな絵が描かれているトランプは俺のお気に入りだ。なんとなく古めかしいところが探偵っぽくていいと思う。

　探偵である俺が何をして日々食いつないでいるかというと、もっぱら人探しだ。たまに浮気調査なんかも依頼される。
　もっとも依頼そのものが少ないので、常にカツカツだが。

「動いたらカロリー消費するよな…うんやっぱり寝よう」

　パラパラとめくったトランプを再び机の上に置き、俺は本格的に寝る体勢になった。すぐに睡魔がやってきて、意識が混濁する。いつどこでも寝れる体質は暇つぶしに最適だ。遊ぶよりなにより、俺は寝るのが好きだからな。

正直、普通は探偵だけで生活していくのは無理だろう。だが俺はこうして生きている。その秘密は俺が行う『人探し』にある。

この世には警察がどれだけ人手を動員しようと、時間をかけて綿密に手がかりを探そうと、決して見つけることができない行方不明者というものが存在する。

トゥルルルッ　トゥルルルッ　トゥルルルッ

心地よく意識を手放そうとした俺の耳に、無粋な電話の音が鳴り響く。安眠を妨害するものには容赦しないと心の中で誓っている俺だが、仕事用の電話に出ないわけにはいかない。あとひと月もすれば真剣に永眠の危機が来てしまう。

「はいもしもし・・・黒須さんですか、何の用ですか～？え、寝てませんよ。失礼ですね。」

寝てはいない。寝ようとしていただけだ。

俺を担当する『目付役』の黒須からの電話だった。俺にしかできない仕事の連絡は、いつも黒須から来る。

「・・・はい、『神隠し』がでたんですね？はいどうもーすぐいきます。」

俺は全国でも数少ない、『神隠し』にあった人を見つけて連れてくることのできる人間なのだ。

一話

黒須が来る前に、俺は適当に身なりを整え、部屋を片づけた。奴は非常に几帳面なので、散らかっていると露骨に嫌な顔をする。それだけならまだしも、ある程度片付かないと部屋に入ろうともしない。そうなると仕事にならないから、俺はしぶしぶ片づけるのだった。

「ムジナ、入るぞ」
「どーぞー」

いつも通りの仏頂面が事務所に入ってきた。どうやら今日は合格らしい。

それにしてもいつになったらこいつはムジナ呼ばわりをやめるんだ。人聞きが悪いからやめろと何度言ったことか。狢沢か恭一と呼べばいいものを。・・・いや。黒須にファーストネームを呼ばれるのは気持ち悪いな。狢沢と呼べ。

心の中で黒須に注文をつけながら、俺は二人分のコーヒーを入れた。豆から挽いた本格的なものだ。探偵たるものコーヒーにはこだわるべきだと思う。

「コーヒーどうぞ」
「ああ、ありがとう。」

この時だけ黒須の仏頂面はほんのかすかに緩む。礼を言うのもこの時だけだ。コーヒー好きというのが俺と黒須の唯一の共通点なのかもしれない。

だが俺は自分のコーヒーが評価されるのは嬉しいが、黒須と必要以上に仲良くなりたいとは思っていない。黒須のほうもそうに違いない。

「今回探してもらいたいのはこの娘だ。谷野辺由美。年は十八。親と兄弟で五人家族」

黒須は鞄から茶封筒を出し、中身を出して見せた。いなくなった状況を記した書類や顔写真などが入っている。

それによると、由美という娘は外で友達と歩いている途中に忽然と消えたらしい。その瞬間を見たものはおらず、気がついたらいなくなってたのだそうだ。

平日の通学路、人通りも多かった。彼女らの歩いた道は一本道で、見晴らしの良いところにもかかわらず、その後彼女を見た者はいない。

「警察は状況からして物理的に不可能だと判断した。消えたとしか思えないとな。」

黒須は不愉快そうに顔を歪めながら言った。警察の無力を嘆いてるのかもしれないが、解決できないものはしょうがないだろう。こういう時のために政府は俺のような、得体のしれない能力者を飼っているのだ。公式には認められないから、目付役（くろす）という連絡係兼監視者をつけて。

「なるほど。じゃ、とりあえず現場まで行ってみましょうか。『神隠し』なら僕には分かりますんで。」

のほほんとした顔で言うと黒須はまた不愉快そうに顔を歪めた。なんだ。俺が何かしたか。

「お前の笑顔は気持ち悪い。いつもニコニコしているが、腹の中で何を考えている？」
「これは地顔ですよ。いつも仏頂面の黒須さんの方がよっぽど分かりませんよー」

ヘラヘラ笑いながら俺は空の食器を片づけた。その間中黒須は俺の顔を睨みつけて、俺の心中を少しでも読み取ろうとしているようだった。

黒須と二人で現場の様子を見に行くことにした。とりあえず今回の失踪が本当に『神隠し』なのかどうか鑑定する必要がある。それが確定して初めて俺への依頼が完了するのだ。

地図を持って俺の前を歩く黒須は、心なしか落ち込んでいるように見えた。普段は偉そうに見えるくらい背筋をたてて歩くのに、微妙に肩を落としている。（地図を見てるせいかもしれないが）そんなに俺の心中が分からなかったことを気にしているのだろうか。

俺はそこらに落ちていた石を拾って手の中で転がしながら、つらつらと考え事を始めた。

黒須は、けして無能ではない。たとえ俺の考えていることが分からなくても、さっき俺が黒須に言ったことが嘘だと見抜けなくても（俺の顔は意識して作ってあるし、黒須は普段無表情だから何かあると分かりやすい。今みたいに）少なくとも俺をただの能天気な奴だとは考えていない。大抵の人間はそこに気がつかないんだが。

別に、俺の本来の性格を隠すことに意味はない。ただ子供のころ

からの習慣が続いているだけなんだが、ここまでくるともう表に出しようもないし、その必要もない。きっと死ぬまでこのままなんだろうと思っている。人間なんて多かれ少なかれそんなものだし、それに黒須はともかく、他の人間にとっては本来の俺よりも表の俺のほうが好ましいはずだ。そのように作ったのだから。

　問題があるとするなら、稀に黒須のような勘のいい奴に気づかれることぐらいだ。何か隠してると思って嫌ってくる。気づかなければ、今よりうまくいっていた筈なのに。

　そんなことを考えながら歩き続けていると、黒須が立ち止まった。どうやら目的地に着いたらしい。

「ここから１００メートル先までの間で由美という娘は消えてしまったらしい。この広告板に書いてあることを由美とその友人が話題にして、その友人たちが由美の消失を確認したのが１００メートルほど先だったという話だ」

　黒須が何かの広告版を軽く叩きながら言った。周りを見渡すと、店や建物はない。道の両脇は田んぼだった。

　こんなところで誘拐なんてしたら、さぞ目立つだろう。自分から気付かれないように離れるのも至難の業だ。後ろにも他の生徒のグループがいたらしいから、ほぼ不可能といっていい。

　俺は少し目を細めて、この世と『異界』の接点を探し始めた。左右に目を向けながら、ゆっくりと歩く。

　俺は『異界』の入口を見ることができる。多くの場合入口は一度何かを飲み込むと閉じてしまうが、その『傷跡』はかなり長い間残っている。それをむりやりこじ開けると、そこには『道』が残っていて、それをたどれば『異界』の向こう側へといける。

ただし何度も行き行きすると入口が閉じなくなってしまう。そうすると、この道を通るものは次々と消え、逆に得体のしれない何かが向こう側からやってくるかもしれない。

だから俺が探しに行けるのは一回まで、向こうに行ける期間は十日までと決まっている。『傷痕』は最低でも一年、長いものでは十年も残るが、期間が十日までと決まっているのは俺が異界を利用して何か余計なことをしないようにするためだ。魔法や錬金術をこの世に持ち込まれるのも、向こうに何か影響を与えるのも、政府は遠慮したいようだ。

『異界』というのは本当に未知数の場所だ。何があるのかわからない。何のためにこの世の人を連れていくのかもわからない。そして人とはわからないものにこそ恐怖する。

おそらく政府は人命救助というよりも、『異界』にこの世のいかなる情報も渡したくないのだろう。もしここが『異界』にとって魅力的な場所だったら、侵略されるかもしれないとでも思っているに違いない。

人ひとりがやっと通れる入口なのに、そこらへんはよく理解してくれないのだ。まあ、たしかに断定はできないんだが。一人で百万の軍も蹴散らせる化け物が、向こうにいないとは限らない。

70メートルほど歩いた所で俺は立ち止まった。空間の一部が、陽炎のように歪んでいる。

「ムジナ、見つけたのか。」

黒須が気味悪そうに周りを見渡している。すぐにでも離れたいと思っているに違いない。

「ビンゴです。ありましたよ。これで依頼成立ですね」

俺がニヤッと笑っていうと、黒須は呆れたような、げんなりした顔をして、

「よかったな」

と言った。そんな得体のしれないところに行くのに、何を笑ってるんだと思っているに違いない。

二話

異界への入口を発見した後、黒須はその詳細と依頼の完了を報告するために警察に行った。これでもう警察が無駄な捜索をすることはないだろう。

それにしても、何も知らない一般の警察官には何と説明しているのだろうか？ちょっと気になるので今度黒須に聞いてみることにしよう。

そして俺は、事務所に帰って異界に行くための準備を始めた。

事務所の一番奥には俺の寝室がある。ベッド、テレビ、本棚、机とイスぐらいしか家具はないが、本や衣類は割と多い。俺は片付けが苦手なので、当然の如く散らかっている。

黒須が見たら目を背けるような状態でも、俺には慣れたものだ・・・だが自室の扉を開けた瞬間、俺は絶句した。

これは、ひどい。

もはや散らかってるとかそういうレベルの次元じゃない。俺の部屋に局地的なハリケーンでも上陸したのか？とか真剣に思った。

本棚が倒れて本が散乱している。イスどころか机が転がってる。蒲団が無残にも切り裂かれている。テレビが台から落ちて横倒しに・・・あれ？画面割れてねえか？

しばらく呆然としていたが、ベッドの下で何やら震えているものを発見して我に返った。

どうにも身覚えがある物のようなのでベッドに近づいて、その前に座ってみた。ベッドの下にいる物体はさらに震えを大きくし、縮こまっているようだ。

「何か言うことは？」

俺はニッコリと笑って言った。それも究極に優しい声で。

だがベッドの下にいる物体は、それが最も危険な兆候であると知っているので震えを増すばかりだ。しかも奥の壁に頭を押し付けているのか、ミシミシと妙な音がしている。

いかん、言葉攻めする余裕はなさそうだ。壁に穴が開いてしまうかもしれない。

とりあえず俺はこいつの片足をひっつかみ、割と乱暴に引きずり出した。

「きゃん！きゃん！」

「暴れるなよ？今度はベッドを破壊して、これ以上俺を怒らせたいのか？」

慌ててベッドの下にハウスしようとするクソでかい毛の塊を、俺は両腕できつく締め上げて拘束する。

そうすると、毛の塊は諦めたのか俺の言葉が聞いたのかおとなしくなって、潤んだ目でこっちを見てきた。しかも切なげにクーンとか鳴いてくる。

それに対する俺の返答は、小揺るぎもしない満面の笑みだった。

俺がこの顔で何年通してきたと思ってる？片腹痛いわ。それに俺は猫派だ。

このデカ犬の名前はシロ。俺の飼い犬にして、魔犬の一種だ。

以前俺がある異世界で調査をしていた時、この犬はなぜだか俺に

懐き、付いてきてしまった。
その時の黒須の顔といったら思い出すだけで床を笑い転げまわれるほどのものだったが、当時はとてもそんなことができる状況ではなかった。俺の役目とは要するに、この世と異世界が関わらない状態にすることだ。その俺が異分子である魔犬を連れてくるなんて論外もいいとで、あやうく解雇されるところだった。

いろいろと思い出してみると余計に腹が立ってきたので、シロの頬か首のあたりの皮を摘んで引っ張ってみた。

おお、案外よく伸びるんだな。ちょっと感心してしまった。
しかも変な顔のくせになぜか癒される。

その後結局、シロに危険はないこと（魔犬は主人の命令に絶対服従らしい）、異界で誰かを探す上で実に有能であることを理由に、特例として俺がシロを所有することが認められた。

シロは普段ただの大型犬にしか見えないが、本来の姿は俺を軽々と乗せれるくらいの巨体であり、その爪と牙は岩すら砕けるのではないかと思えるほど力強い。
その移動能力と戦闘力は、もはや俺にとってなくてはならないものだ。異界では危険な生物や人間に遭遇することが珍しくない。

しかたない。今日のところは変な癒し顔と過去の功績に免じて許してやろう。
それにしてもなんでこんなに散らかしたのやら・・・。「散らかすな」と言っておいたはずなのに。

頬の皮を引っ張るのをやめて頭をなでてやると、俺が許したことが分かったのか目を細めて気持ちよさそうにしている。

ふとシロの足元に目をやると、そこにはでかいネズミが転がっていた。もしかしてこれを捕まえようとしたために部屋がこんな有様になったのだろうか。猫じゃあるまいし・・・。
そう思ってから気がついたが、俺はシロに「俺が留守の間、侵入者がいたら撃退しろ」と言ってある。もちろん優先事項で。
・・・なんだか叱ったのがちょっと申し訳ないような気がしたが、俺のせいなのか？

部屋を最低限片づけた後、俺は異界へ行くための準備をし始めた。基本的に待っていくものは、武器、食糧、身分証だ。身分証は、神隠しの被害者に俺がこちらの世界から来た人間であること、連れ戻しに来た事を証明するものだ。（信じるかどうかは結局その人次第だが）武器はもちろん護身用で、黒須から渡された小型の銃と匕首、刀である。

ほとんどの『異界』は、こちらの世界ほど文明が発達していない。そのかわり、いわゆる魔法といえるものがあったり、魔物のような生き物がいたりする。

銃は知らなければ武器に見えないという点で便利だ。万が一誰かに捕まっても、取り上げられる可能性が低い。
匕首や刀は、俺には分からないが何らかのお清めが施されているらしい。意外にもこれが異界の魔物に効いたりするのだ。
何百年も昔は異界とこの世を隔てる壁が薄く、多くの国に影響を与えていたらしい。つまり今この世に残っているお祓いや魔術は、もともと異界の魔物に効果のあるように作られたということだ。
当然、神話や伝説にも異界が関わっていることが多い。以前俺は

異界で、ケンタウロスとしか思えない生き物を見たことがある。

服装はスーツだ。もっと動きやすいものにしろとさんざん黒須に言われたが、これは譲るつもりはない。こちらの世界の人間だとすぐに分かるからという理由もあるが、スーツの内側に銃を仕込むのは探偵のロマンだと俺は思う。そんな探偵は普通いないが。

「さて、そろそろ行くか」

部屋の片づけで思わぬ時間を食ってしまった。携帯で黒須に迎えに来るよう連絡する。（武器の所持を見咎められたら面倒なので距離が近くても車だ）

黒須と共に現場に行くと、道はすでに封鎖され、一般人は立ち入れなくなっていた。そんな中を俺と、黒須と、シロが進んでいく。

常に笑顔の俺と、仏頂面の黒須と、犬。

はたから見ればさぞ奇妙な光景だろうなと思って笑ってしまう。

まあ、最初から笑っているのだが。

見つけておいた異界への『門（ゲート）』の前で、俺は立ち止まった。

「じゃあ、行ってきます。」

「幸運を、祈る」

短い別れの挨拶を済まして、俺とシロはこの世から消えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1906g/

異界探偵

2010年10月11日02時45分発行